

日吉台地下壕保存の会会報

特集号 （軍令部第三部等地下壕調査）

日吉台地下壕保存の会

慶應日吉キャンパス（複谷） 軍令部第三部・航空本部等 地下壕内部調査

2009年5月21日実施

報告 新井 揆 博

日吉台地下壕保存の会では、5月21日、慶應義塾文学部准教授安藤広道、尚美学園大学教授桜井準也、吾妻考古学研究所所長大坪宣雄、主任研究員山田仁和各氏とともに軍令部第三部・航空本部等地下壕の内部調査を行いました。

調査をはじめるに当って、関係者約20名は、当日9時に体育館建設現場事務所に集合し、体育館工事関係者から地下壕内の安全確認と注意、次いで調査の打合わせをおこない、ヘルメット・軍手・長靴・ライトを着用して2a坑道入口から入坑しました。

3a坑道・4a坑道、そして「井戸」と思われるところから石灰が坑道にまで流れ出ている場所、連合艦隊司令部へ通ずる分岐点（行止り）、「水槽」、機械を設置した跡と思われる場所まで巡見しました。20cmほど泥水が溜まっていたり、岩石が堆積している危険な場所もありましたが、約60cm四方のマンホール、天井には数か所鉄パイプの空気穴など多くの機能を持った優れた地下壕であることが理解されました。中には1973年にこの地下壕に入ったことを示す落書きなども見られました。

その後、3班に分かれて測量などの調査に入り17時ごろ終了しました。調査の詳細につきましては、後日改めてご報告できると思いますが、とりあえず、当日記録した写真の一部、地下壕平面略図・断面構造図と本会がかつてこの地下壕に軍人として関わった方の「聞き取り資料」「寄稿資料」をご紹介します。戦争末期の日本海軍がこの地下壕で何をしていたのかの一コマを把握したいと思います。

1 地下壕内部の記録写真



2a入坑部一部破損 断面a-a



2a坑道2番目交点の天井排気孔鉄パイプ



3 a 坑道奥は岩石で行止まり。断面 g - g'



3 a 坑道 2 番目交点にある集水枡



4 a 坑道 2 番目交点から 3 a 坑道に向う。



連合艦隊司令部地下壕への分岐点(行止り)。



「井戸」らしい場所から坑道に石灰が流出。



水槽前坑道、壁面は白ペンキで塗装。



水槽前



水槽前



2 a 坑道1番目先右側の部屋。機械を設置？



3 a 坑道で測量調査をするメンバー



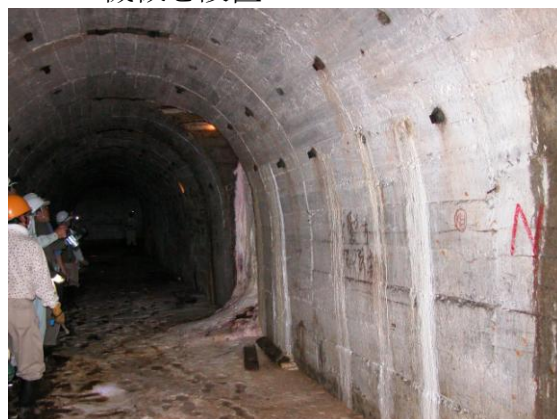
機械を設置していたと思われる



機械を設置？



白ペンキの塗装が一部していない個所がいくつか見られた



天井の高度が高い坑道



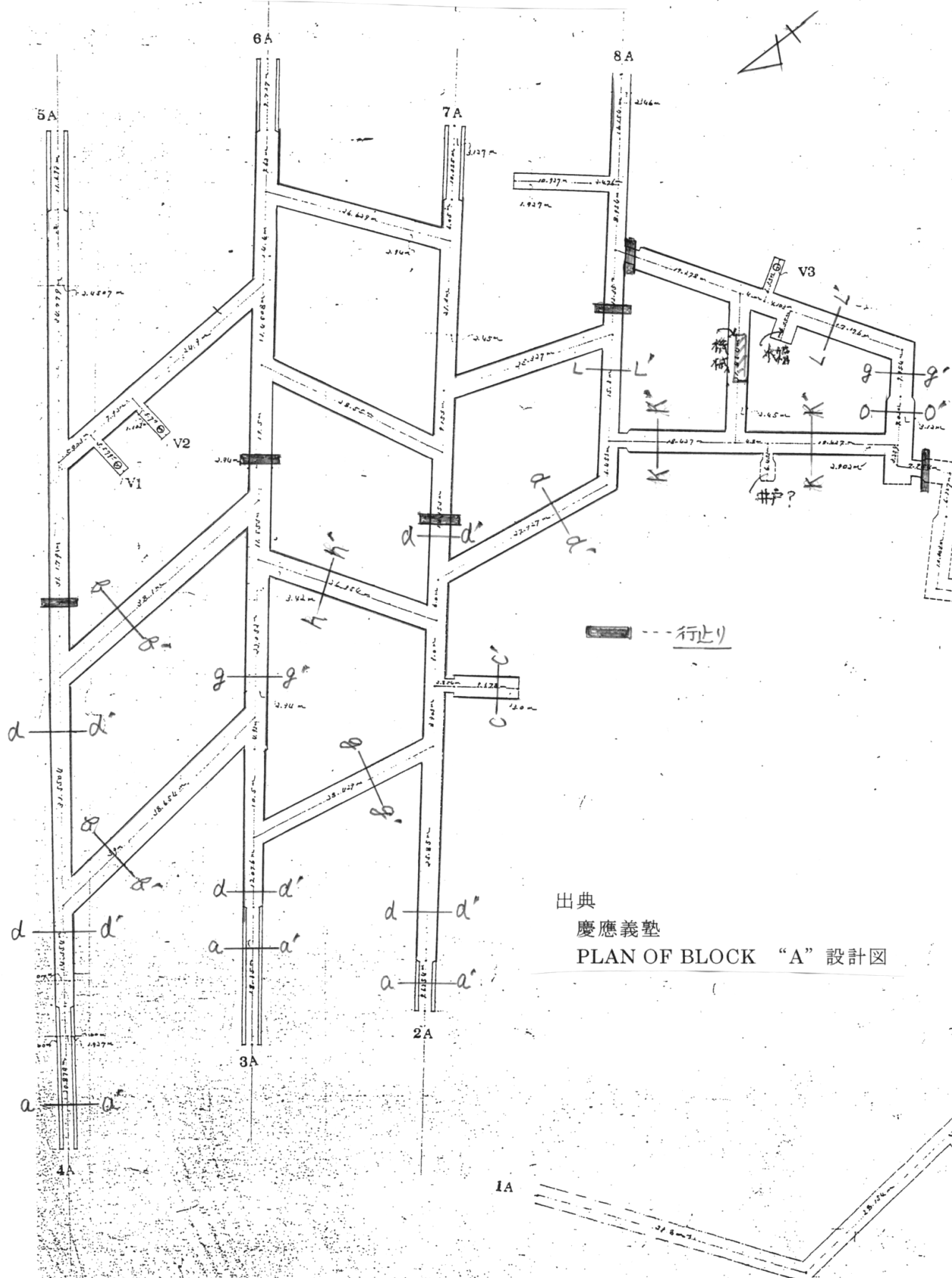
新幹線工事のため行き止まり



壁面脇の水路

2 地下壕平面略図(以下の図面は今回調査したものではありません)

軍令部第三部・航空本部等地下壕図



3 地下壕断面構造図(以下の図面は今回調査したものではありません)

地下壕断面図

出典

慶應義塾

CROSS SECTIONS

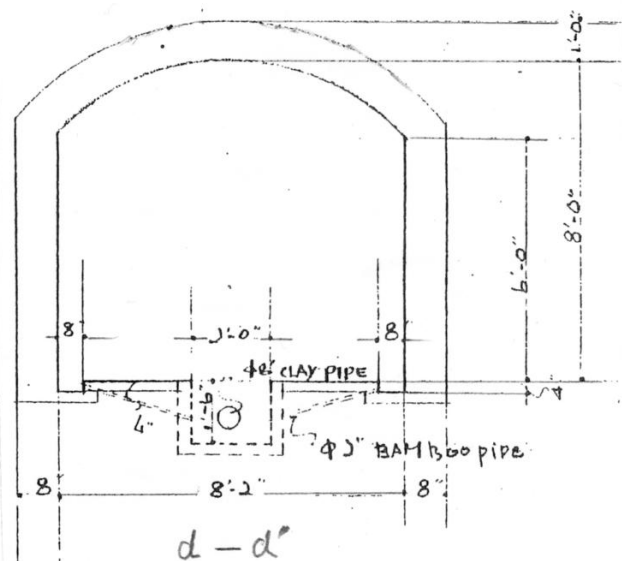
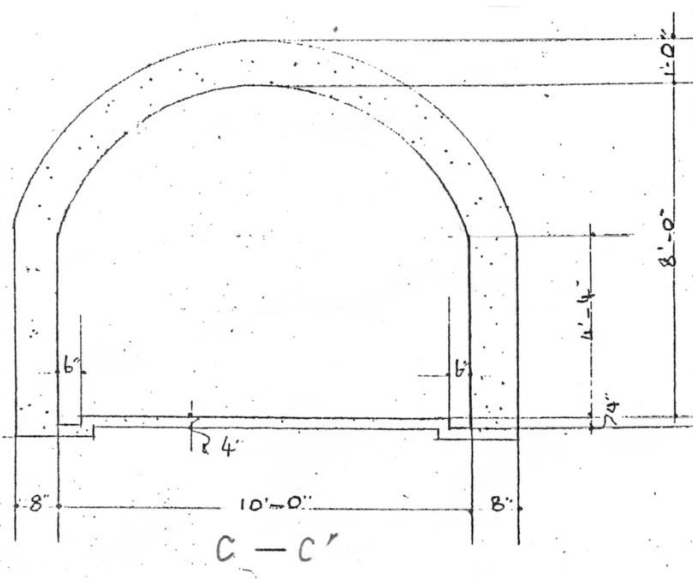
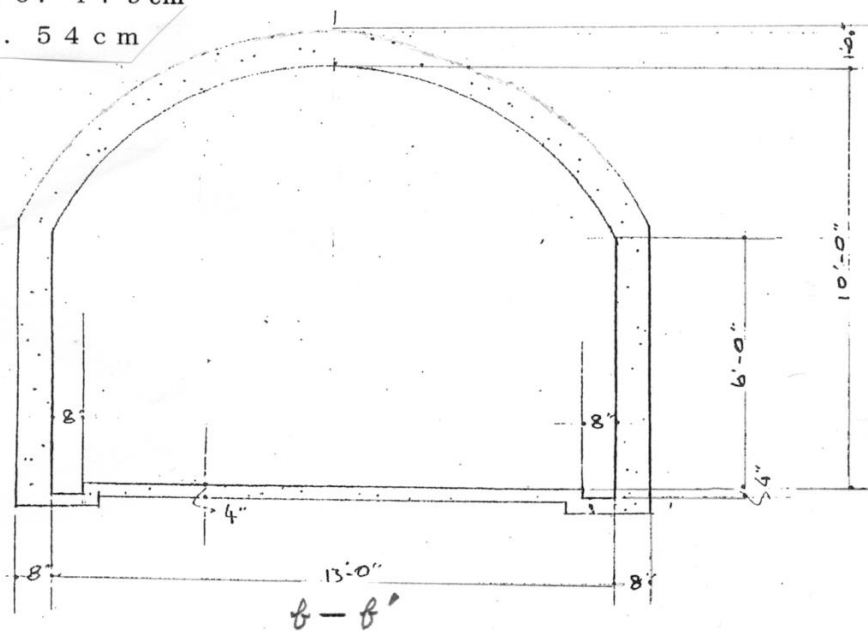
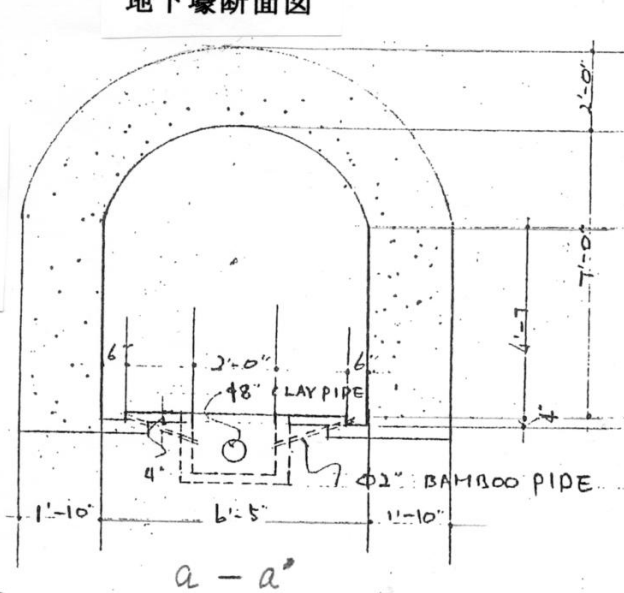
BLOCK "A" 設計図

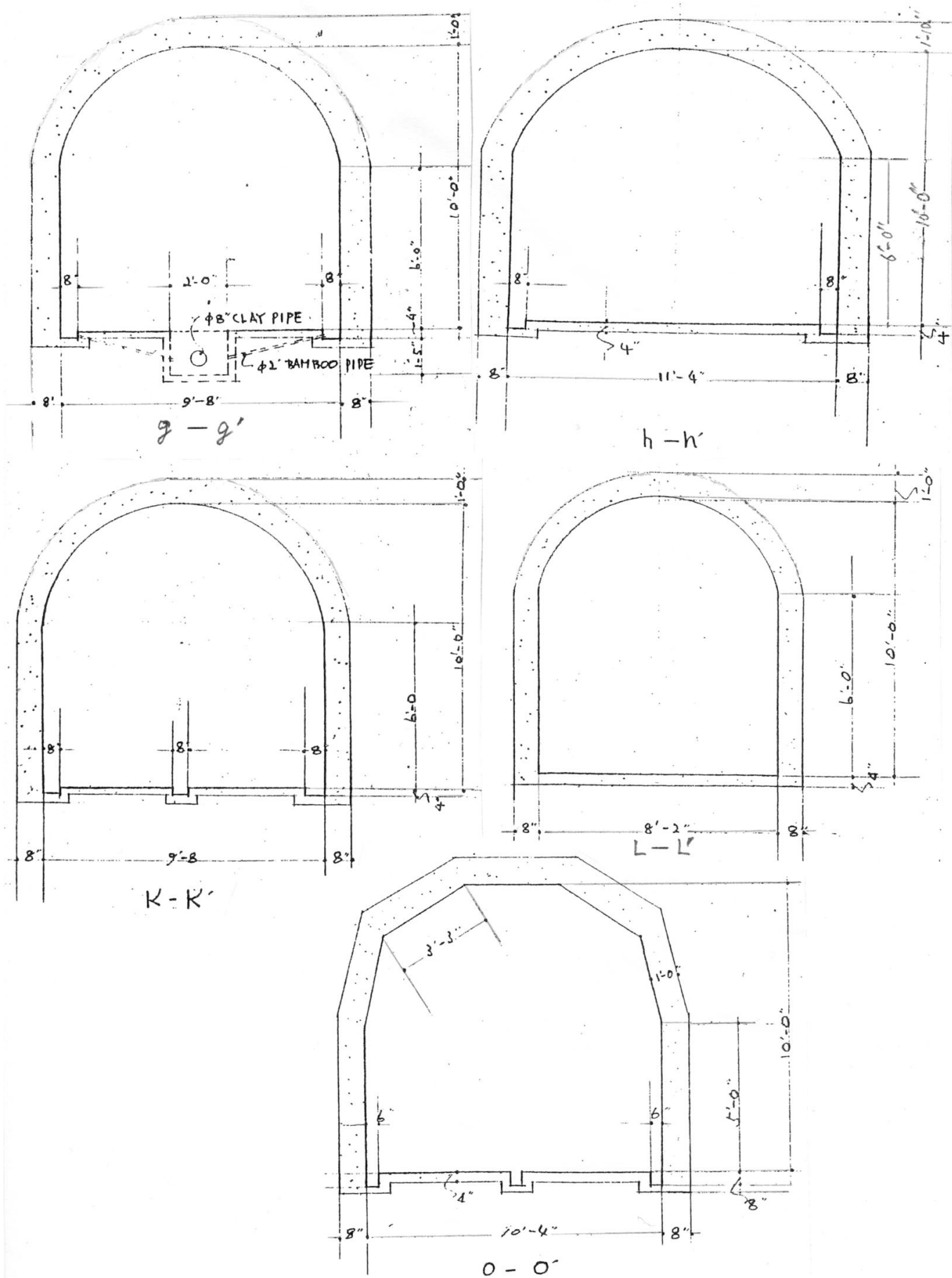
単位 フィート

1 フィート = 12 インチ

= 30.479 cm

1 インチ = 2.54 cm





4 軍令部第三部・航空本部等地下壕で何をやっていたのか

1) 本田直左衛門親英 氏 航空本部第一部勤務 当時海軍少尉

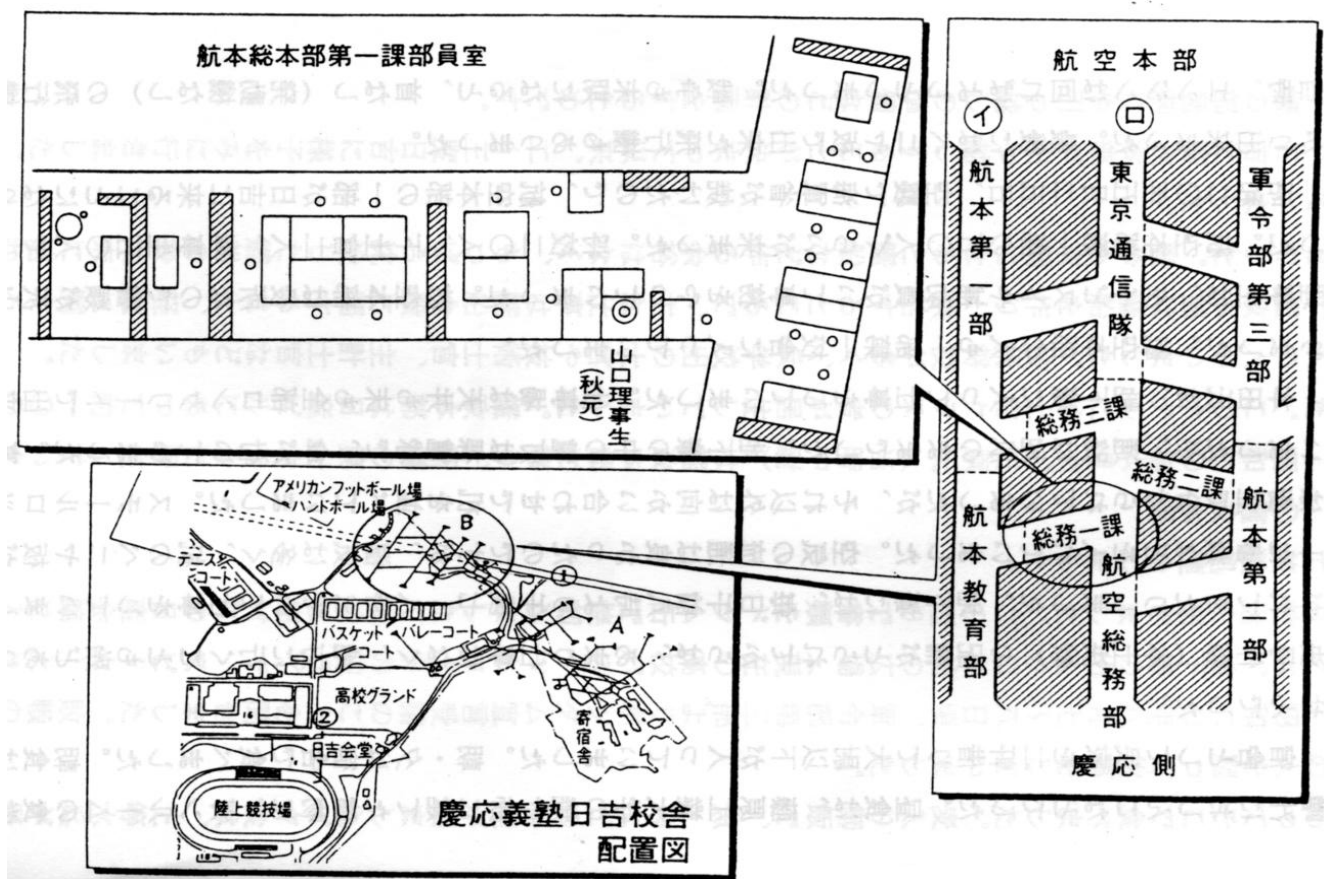
航空本部、海軍省が焼けて日吉に

昭和19年10月、航空本部に転勤になった本田氏（当時海軍少尉）は、航空本部第一部（補給部）に属し飛行機部品の調達・配分の仕事をしていました。ただし、無線・機銃・魚雷は別でした。本田氏は飛行機の発動機とプロペラを担当し、軍令部の作戦計画に沿って工場の部品を発注し、出来上がると各航空隊に分ける役割でした。・・・

昭和20年5月25日、空襲で海軍省が焼けたので、航空本部の一部が日吉に来ることになりました。航空本部第一部の50人ぐらいがきました。将校20人、下士官2人、理事生50人でした。理事生はタイピストや補助員がいて事務をやっていました。航空本部は役所なので書類が沢山ありました。航空本部の人の一部第一校舎に入りました。

本田氏は、地下壕に入って仕事をしていました。仕事場は、天井も床も全部コンクリートで出来ていました・・・高官は衝立で分けられていましたが、それ以外は向かい合わせで机を並べていました。スチールロッカーに書類などを入れていました。空気の流通は良かったのですが、湿気は多く、机のベニヤ板が剥がれていきました。地下壕には、毎日午前8時より午後7～8時までいて仕事をしていました。決号作戦（本土決戦）の配備がとられてからは、あまり仕事がなく地方に行くこともほとんどありませんでした。

（日吉台地下壕保存の会編『太平洋戦争と慶應義塾』1997年p30～32より）



2) 実松 譲 氏 軍令部第三部第5課勤務 当時参謀海軍中佐

軍令部第三部が地下壕に入ったのは昭和20年7月

軍令部第三部第5課(対米国)に勤務されていた実松譲元海軍中佐は、日吉台地下壕保存の会に「日吉における軍令部第三部」と題して寄稿されましたが、その中で地下防空壕の思い出を次のように述べています。

「昭和20年7月ごろ、われわれは事務室にあてていた地上の校舎から、いよいよ日吉台の地下防空壕内で執務することとなる。中央の情報部なども決戦態勢にはいったわけである。

ところで、防空壕といっても校舎の裏の台地に掘った長いトンネルの連続にすぎず、多くの出入り口のある簡単なものだった。

トンネルの地肌が見えないように、いちおう白木の板がうちつけてあったが、壕内の湿度はとても高かった。机も普通のもではなく、白木のままのきわめて簡単で急造した粗末なものであった。しかもその大きさは縦が90センチ、横が120センチほどのものが最大で、もっと小さいものが多かった。引き出しが2、3か所についていたが、取手は木片をうちつけたものだった。

また、椅子も机とおなじく、日曜大工がこしらえたような代物で、とても椅子とはいえなかった。

大机は二人で共用し、小机は一人用であった。だいたい二つずつ向かい合わせ、一方を壁にくっつけ他方が通路に面して並べられていた。だが、その通路たるや、二人がすれちがうには、ちょっと狭かった。ただ、ところどころに少し広いところがもうけられ、数人が集まれる小室があり、壁には棚がつくりつけてあった。

こうして壕内で、われわれは以前のように、究理をつくす合理的な対米情報作業を続けていたのである。

天がわれわれの努力をあわれんだものか、こうした終戦に近い時にでも、シベリア鉄道を経由したクーリエ便で、アメリカの新聞ニューヨークタイムズや雑誌—タイム、ライフ、ニューズウィーク—などの資料が、今までどおり入手できた。また、スイスのジュネーブからは、空色の紙に印刷された航空関係のニュースも届いていた。

われわれは、これら資料などと取り組みながら、対米情報作業の有終の美をおさめるべく努力し続けたのである。」

(「KEIO せいきょう」教職員版第41号 1988.4.1より)

以上

連絡先(会計) 亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会